

第99期 事業報告書

2002.7.1 ▶ 2003.6.30



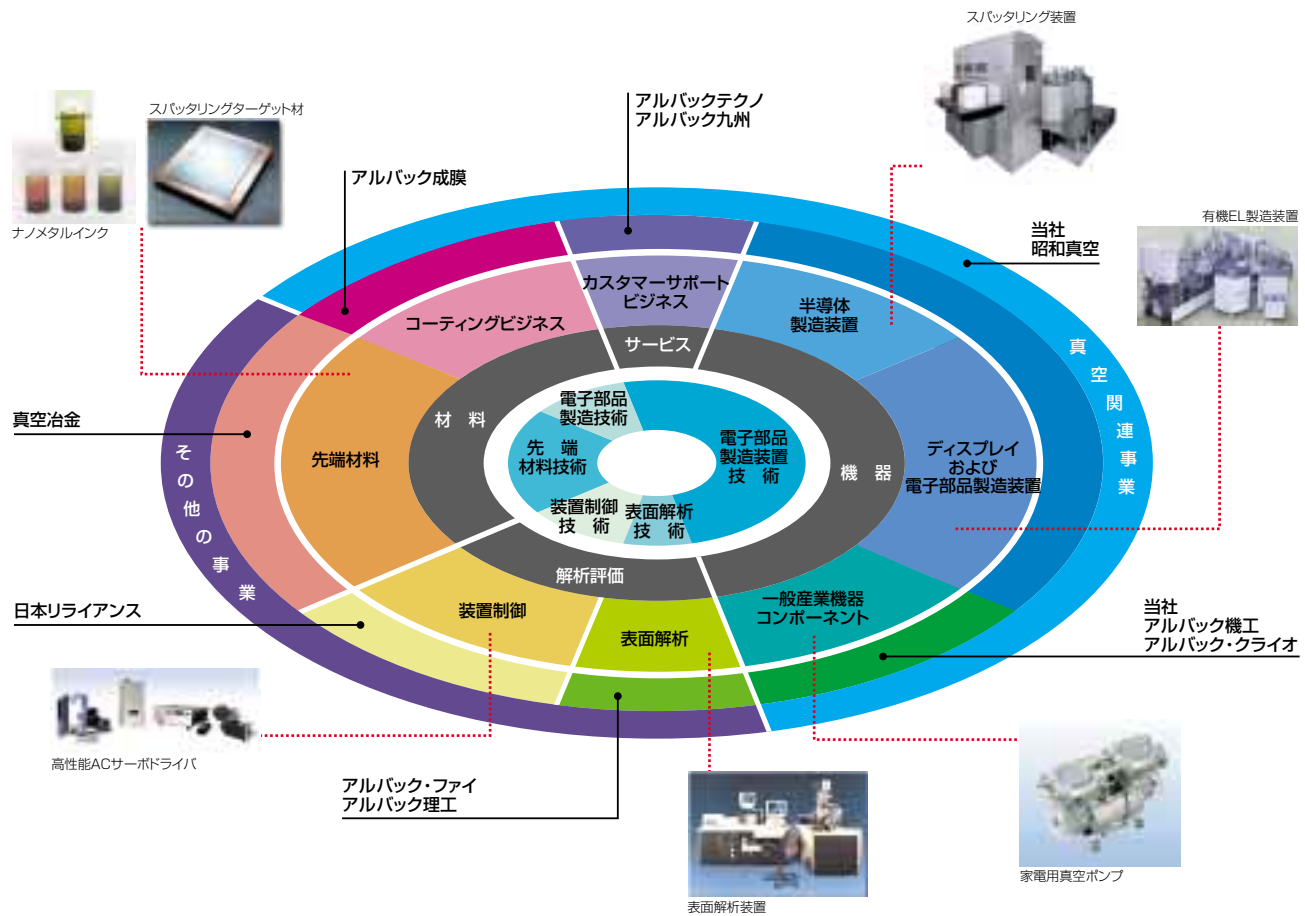
..... 真空技術と次世代発想



ULVAC

アルバックの事業は、セグメント上では、真空関連事業、その他の事業に区分され、さらにディスプレイおよび電子部品製造装置、半導体製造装置、一般産業機器・コンポーネント、表面解析、装置制御、先端材料、コーティングビジネス、カスタマーサポートビジネスという8つのソリューションに分類されます。これらを総合的に「アルバックソリューションズ」として提供しており、グループ各社の有機的な結合とシナジー効果によるトータルなソリューションが当グループの強みです。

■アルバックグループの事業構成図



独創技術と生産改革が大きな成果をもたらす。

当社は、生産改革の推進による競争力向上を背景に、中国や韓国、台湾などの成長する「地域」と成長が見込まれる「分野」へ、独創的な「技術」を用いて積極果敢に事業を展開してまいります。

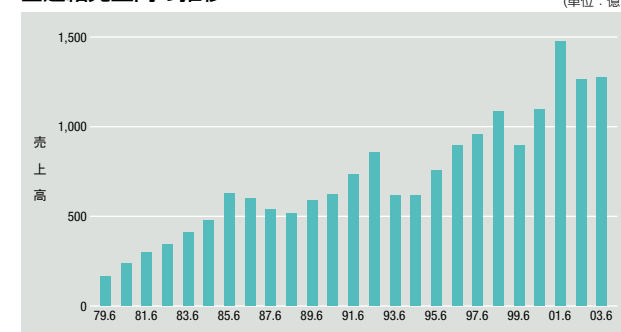


代表取締役社長 中村久三

■連結業績ハイライト

科目	当連結会計年度 2003年6月期	前連結会計年度 2002年6月期
売上高	127,472	126,129
営業利益	4,736	2,276
経常利益	3,550	1,991
当期純利益	1,729	668
総資産	173,949	160,276
純資産	41,951	40,101
EPS (円)	48.10	20.62

■連結売上高の推移



Q 2002年度の業績をどう評価していますか。

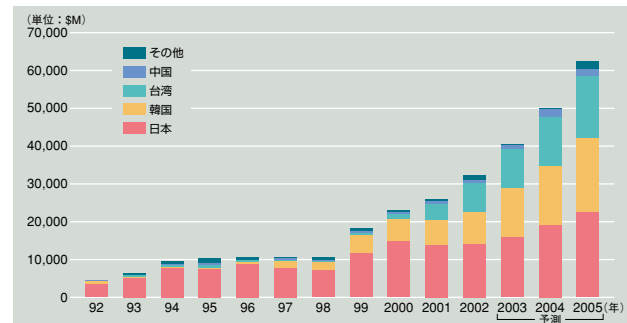
A アルバックにとって、非常に大きな意味を持つ年度だったと思います。大型基板への活発な設備投資で好調だったFPD(フラットパネルディスプレイ)を除いて、事業環境は総じて非常に厳しいものでした。そうした中でも利益を生み出せる企業に変わる「きっかけ」をつかめたと確信しています。アルバックは3年前から全社的な「生産改革」を掲げ、完全標準化や製造予算による予測管理などを進めてきましたが、その成果が具体的な数値として表れてきました。特に、売上増を最優先課題とし、その実現に注力してきたために限界利益率は長年低下し続けていましたが、2002年度は前期に比べて大幅に上昇しました。それも、今後の成長に向けた投資をきちんと行った上でのアップであり、高く評価できると思います。業績としては、厳しい環境の中でも徹底したコストダウンと固定費の圧縮を進め、売上高はほぼ横ばいながら、経常利益は大幅に回復しました。



Q 好調なFPDのマーケット状況はどうか。

A テレビの大型化や買い替え需要の高まりなどによって、これから数年は成長を続けると期待しています。FPDは、パソコンやテレビだけでなくPDA（携帯情報端末）をはじめとしたアプリケーションも豊富で、しかも現在主流となっている液晶ディスプレイ（LCD）だけでなく有機EL（エレクトロルミネッセンス）ディスプレイやPDP（プラズマディスプレイ）といった次世代ディスプレイも開発されているなど、技術や用途の面で広がりを持っています。さらには、FPDに付随してDVDのビ

■FPD市場規模（生産ベース）推移と予測



(出所)：(株)プレスジャーナル「Semiconductor FPD World 2003.4」掲載グラフをもとに当社作成

ューアーやホームシアターといったデジタル家電の市場も拡大する可能性があります。アルバックは、液晶製造装置で第5、6、7世代の大型基板用スパッタリング装置や最先端の低温ポリシリコンTFT用LCD製造装置を提供しています。有機EL用製造装置やPDP用製造装置においても先駆的に取り組んでいます。その結果、液晶ディスプレイ製造用スパッタリング装置とPDP用製造装置においては世界市場で常にトップシェアを維持し、さらに、有機EL製造装置でもトップ争いを展開しています。こうした強さをフルに生かし、この成長分野でのトップシェアを死守していきます。

Q FPDで有望なディスプレイは何だと考えていますか。

A 現時点では、どのディスプレイがどう成長するかは見極められません。液晶ディスプレイとPDPは絶対調ですし、有機ELも大きな可能性があります。特に有機ELは、今は小型のディスプレイをターゲットにしていますが、本命はテレビで、それに向けた技術開発も進められています。将来的には、液晶をしるく画質とコストを実現する可能性も高いと思います。さきほども言いましたように、将来、どのディスプレイが主流になるかは分かりません。その意味でも、すべてのディスプレイに取り組み、それぞれの分野でトップシェアを維持していけば、この競争に勝利できると確信しています。

Q マーケットはグローバルになっていますが、どのような展開をしていますか。

A FPD・半導体とも、これからマーケットとして成長するのは韓国、台湾、中国です。特に、好調な液晶ディスプレイについては世界のほとんどの製造拠点が韓国と台湾に集中しています。これからの競争に勝ち抜くためには、韓国・台湾・中国国内にきちんとサービス・生産・マーケティングのイ

ンフラを整備することが必要です。そういう戦略的な観点から、アルバックは厳しい事業環境の中でも積極的な設備投資を行ってきました。大型化が進む液晶ディスプレイでは韓国の工場では2期工事を完了し、現在は第5世代の液晶製造装置を出荷しています。また、台湾ではFPD・半導体業界向けのサービスをさらに充実するために、OEM生産、消耗品供給、中古装置リファビッシュなどを目的とした台南工場を設立しました。さらに中国では、寧波、上海に続いて、蘇州に新たな拠点として「アルバック蘇州」を設立し、2004年5月から稼働を開始させる予定です。特に中国は、「世界の工場」と言われるように、さまざまな分野で世界最大の生産拠点になろうとしており、あらゆる分野にアルバックの技術を生かせると確信しています。

Q 新規成長分野として着目しているのは何ですか。

A アルバックはFPDや半導体の製造装置事業に特化しているわけではなく、あくまでも総合的な真空装置メーカーであり、真空技術とそこから派生した真空周辺技術をあらゆる分野に生かすことを目指しています。今後、エネルギー・環境分野には大きな可能性があると考えています。すでに、モーターとガソリンエンジンを組み合わせたハイブリッドカーが普及しつつあります。ハイブリッドカーには多くのモーターが搭載され、そのモーターには強磁性体のマグネットが使用されています。実は、その製造に不可欠なのが真空技術というわけです。ハイブリッドカーの普及に伴い、大きなビジネスチャンスが訪れると期待しています。また、2次電池には水素吸蔵合金が使用され、真空溶解炉などの多くの真空装置が使われています。さらに、ファインケミカルやファインメカトロニクス、バイオなどの分野も市場が拡大しますので、注力していきたいと思っています。このように、これからもさまざまな産業に真空技術とその周辺技術を生かしていきたいと考えています。

Q 生産改革の具体的な成果はどうか。

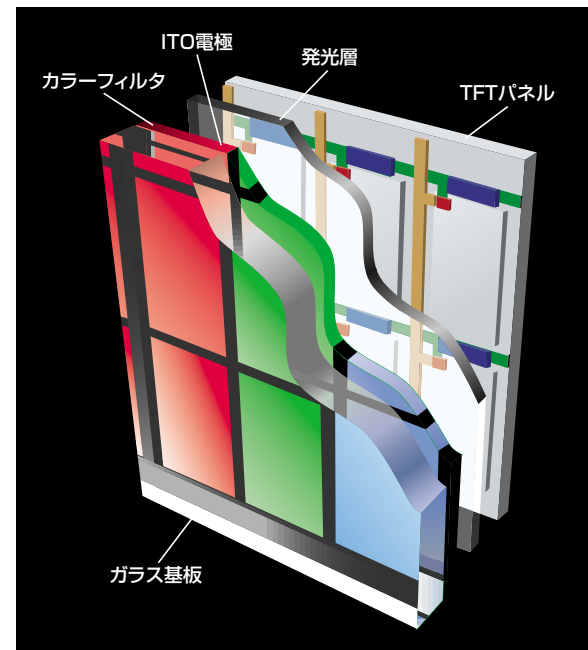
A 最初に申し上げたように、2002年度では具体的な成果があがっています。モジュール化、ユニット化による標準化機種は売上の3分の1にまで拡大しています。利益を確実に生み出すためにアルバック独自の予算予測管理システムを開発し、大なる成果が生まれています。また、調達原価の圧縮では、海外からの部材調達もスタートさせ、それが国内調達にも良い効果をもたらしています。さらに、海外生産も利益をあげてきています。このように生産改革の効果は生まれてきていますが、お客様の要望する先端的な性能やスピードに対応するために、必死で開発をして納入する際に、完成度が十分でないため追加の手直しがどうしてもできます。この追加手直しの費用の低減や開発設計などを行うエンジニアリングの改革が必要になっています。これは「生産改革第2段階」と言えるもので、そのために生産本部を新設し、取り組みをスタートさせています。

Q 2003年度にはどのような点に注力していきますか。

A 市場環境はまだまだ厳しいですが、成長が期待できるFPDを中心に売上を伸ばしていきたいと思っています。また、生産改革を通じて限界利益率を大幅にアップさせ、収益性の向上を図りたいと思っています。さらに、有機ELやFPD以外の分野でもアルバックだけが得意な独創技術の開発を推進するとともに、AR膜コーティングやバイオセンサーといった新規アルバックソリューション事業も拡大していきたいと考えています。最初に申し上げたように、アルバックは利益を生み出せる企業体質へと変革を始めています。その変革を加速し、より収益性を高めるために、徹底したコストダウンと受注拡大、グローバル化、技術開発を力強く推進していきます。併せてキャッシュ・フロー改善を図り、財務体質を強化していきたいと思っています。

注目される有機ELディスプレイ

■有機ELディスプレイの仕組み



(出所)：「ナノエレクトロニクス.jp」

■主な薄型表示装置の特徴比較

	薄型化	大型化	消費電力	応答速度	TV向けの製品化時期
液晶	●	■	●	■	販売中
プラズマディスプレイ	●	●	▲	●	販売中
有機EL	●	▲	●	●	2005年メド
FED*	●	■	●	●	2004年メド

●非常に優れる ●優れる ■普通 ▲やや劣る

*：FED=Field Emission Display (電界放出型ディスプレイ)

有機ELディスプレイは、電圧を加えると発光する有機化合物をディスプレイの画素としてガラス基板に塗布して映像を表示する装置です。液晶ディスプレイは自ら発光しないために画面を明るくするバックライトを必要としていましたが、有機ELディスプレイはそれが不要なため、さらに薄型・軽量・省電力が可能になっています。また、液晶ディスプレイに比べて、視野角も広く、しかも表示速度が速いため動画の表示に適しているなどの特性を持っています。

こうした特性を生かして、次世代携帯電話やPDA(携帯情報端末)、デジタルカメラといった小型ディスプレイ、さらにはテレビへの需要が有望視されており、2005年の世界市場規模は2,000億円~3,000億円になると見込まれています。

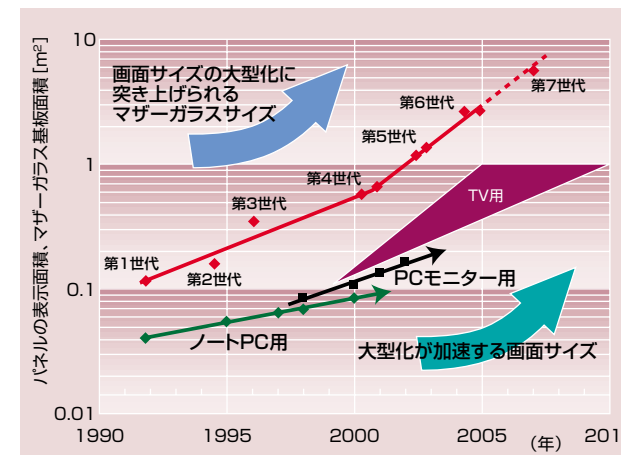
有機ELディスプレイは、ガラス基板に電極や有機化合物を蒸着させ、それを封入して製造しますが、そこで大きな役割を果たしているのが真空蒸着装置です。アルバックは、コア技術をフルに生かして有機ELディスプレイ製造装置の開発にも先駆的に取り組み、世界市場でトップ争いを展開しています。特に、有機EL製造用真空蒸着装置は世界で初めて開発された装置で、基板導入から封入までを含めた一貫自動システムを提供しています。

Coffee Break

【有機ELの原理発見のきっかけ】

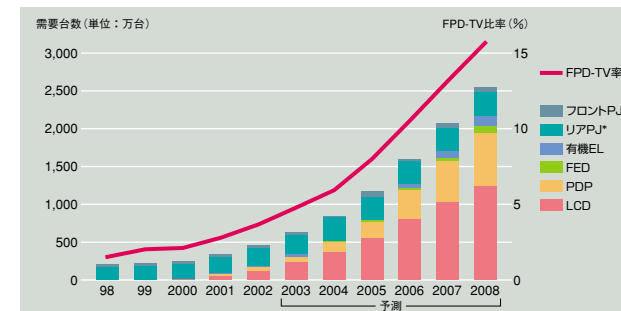
エレクトロ・ルミネッセンスとは蛍光性化合物に電場を加えた際に励起して発光する現象。1936年にジंकサルファイドに銅を混ぜた無機材料に高い電圧をかけると発光することが判明。その後、イーストマン・コダック社が1987年に有機EL素子を発見したことが有機ELの歴史の始まり。なお、アルバックは基本特許を持っている同社と三洋電機との3社で有機ELディスプレイ製造装置の技術開発に関する提携を結んでいる。

大型化が進む液晶ディスプレイ



(出所)：(株)プレスジャーナル「Semiconductor FPD World 2003.4」 日本アイ・ビー・エム(株)北原洋明氏作成

■世界のFPD-TVの需要・TV需要全体に占める比率推移予測



(出所)：野村総合研究所

*：PJ=プロジェクト

家電店のテレビコーナーを見て回ると、かつてのブラウン管に比べて、画像が高精細になるとともに、テレビのサイズがどんどん大きくなっています。大型テレビのパネルには液晶とPDP(プラズマディスプレイ)が使われており、最近までは性能上、30インチ以下は液晶、それ以上はPDPとされていました。しかし、現在では30インチをはるかに超える大型パネルも液晶で製造されるようになってきました。

これに伴って急速に進展しているのが、ガラス基板の大型化です。液晶パネルは1枚の大きなガラス基板をカットして複数製造しますが、大型パネルをより効率的に製造するためにはガラス基板そのものを大型化することが必要です。そのため、現在、世界の液晶メーカーは第5世代から第5.5世代に対応した設備投資を行っており、最近では第6世代(約1.5m×1.8m*)、あるいは第7世代(約1.8m×2.1m*)に移行する動きもあります。

こうしたガラス基板の大型化はこれからも進むと予測されますが、それに伴って技術的な課題も生まれてきています。基板サイズがある大きさを超えると、既存の技術では対応できず、新しい技術が必要になってくるのです。アルバックはこれまで、スパッタリング装置やプラズマCVD装置などを製造し、それぞれ高いシェアを占めてきました。それとともに、プラズマCVDに替わるCATCVD(触媒化学気相成長)や、スパッタリングに替わる新しい方式の研究も積極的に進めています。その意味で、ガラス基板の大型化に伴う新技術のニーズはアルバックにとって大きなビジネスチャンスであり、新技術でもトップを走り続けます。

Coffee Break

【マザーガラス大型化の背景】

液晶ディスプレイの世界では、90年代以降、マザーガラス基板サイズがどんどん拡大し、現在では1m角を超えるラインが稼働しています。液晶ディスプレイの画面サイズ拡大の動きが背景にあり、最近ではその拡大スピードは、これまで以上に早まる傾向にあります。

*：ガラス基板の大きさを示す

営業の経過および成果

当連結会計年度(2002年7月1日から2003年6月30日まで)

当企業集団の主要な顧客である電子機器及び半導体業界は依然として力強さに欠け、予断を許さない状況が続いており、顧客の設備投資は大幅に抑制されました。しかし、このような状況下においても、ディスプレイ業界に関しては堅調でした。期後半には、一部の半導体業界で回復の基調が見られるものの、同業界全般はまだまだ長期的な不況の様相を呈しています。

当企業集団は、このような厳しい経営環境に対処するため独創的な新製品の市場投入とアルバックソリューションズの推進による積極的な受注活動を行ってまいりました。また、製造装置の徹底的な標準化(モジュール化、ユニット化)による大幅なコストダウンを実現し、経費の削減などを実施することで、固定費の大幅な圧縮も進めてまいりました。

期後半に突然発生したSARSの影響などにより、連結売上高については1,274億7千2百万円と同1.0%増となりました。しかし、期後半から受注が拡大し、連結受注高については、1,477億6千7百万円と前連結会計年度に比べ37.0%増加しました。また、連結経常利益は、コストダウンの結果、35億50百万円、同78.3%増と回復しました。連結当期純利益については、17億2千9百万円となりました。事業の機種別の業績については、以下のとおりです。

真空関連事業

ディスプレイおよび電子部品製造装置、半導体製造装置、コンポーネント、その他真空機器

ディスプレイおよび電子部品製造装置においては、期央から韓国、台湾など大型液晶ディスプレイのいわゆる第5世代や有機EL、プラズマディスプレイパネルなどの設備投資が活発になり、また、新商品の開発が順調に推移したこともあり、受注は好調を維持しました。しかし、売上は期初受注残が少なかったことや

SARSの影響等により微増にとどまりました。

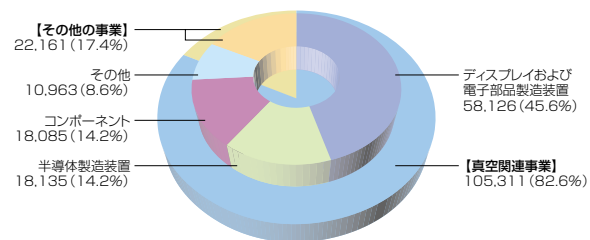
一方、半導体製造装置は半導体市況の低迷が続き、顧客の設備投資は、デジタル家電関連以外は大幅に抑制され、受注、売上とも低調に推移しました。

コンポーネントについては、電子部品業界向けの製品が受注、売上とも堅調なことから、独創的な商品を開発し市場に積極的に投入した結果、受注、売上とも好調に推移しました。

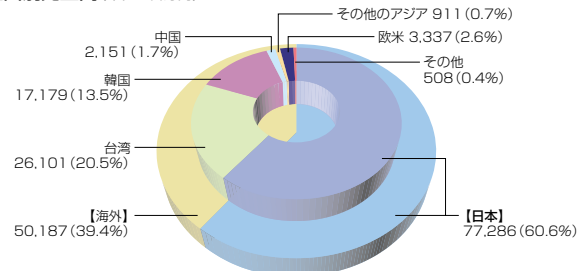
その他の真空機器については、一般産業機器は環境・エネルギー分野に期待がもてる永久磁石一貫ラインの引き合いが活発化したものの、大幅な受注増には至りませんでした。

その結果、連結受注高は国内外あわせて1,257億1百万円と前連結会計年度に比べ42.0%増加し、連結売上高については、1,053億1千1百万円と同2.0%減少しました。連結営業利益は34億3千6百万円、同27.2%増と回復しています。

■事業別売上高(単位:百万円)



■国別売上高(単位:百万円)



その他の事業

先端材料、表面解析装置、装置制御等

その他の事業については、アルバックソリューションズを生かした積極的な拡販活動を行なった結果、連結受注高は国内外あわせて220億6千6百万円と前連結会計年度に比べ27億4千9百万円と同14.2%増加し、連結売上高については、221億6千1百万円と同19.1%増加しました。また、連結営業利益は11億7千7百万円となりました。

*なお、上記金額には消費税等は含まれていません。

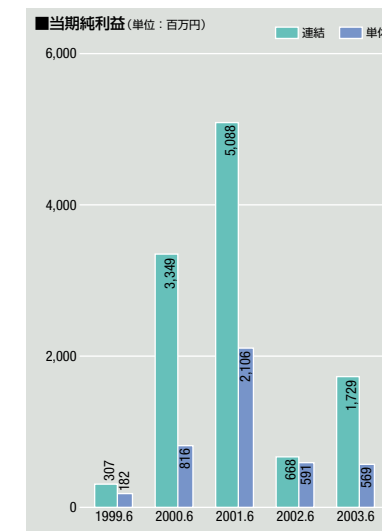
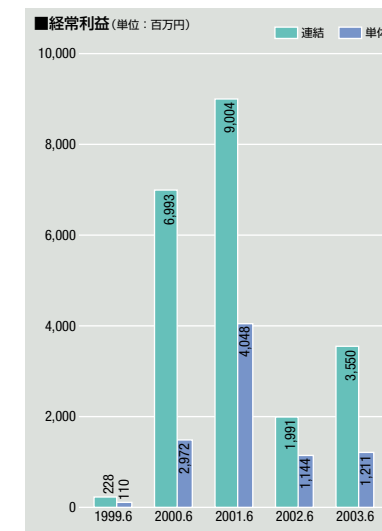
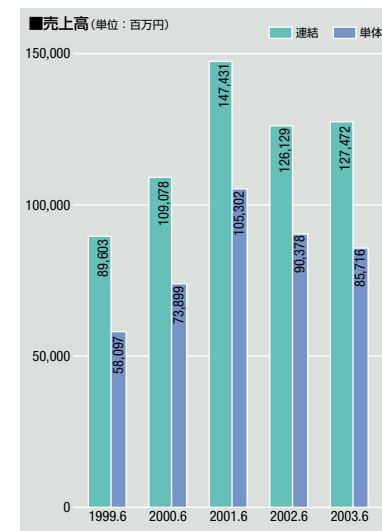
会社が対処すべき課題

当企業集団の主要な顧客である電子部品業界及び半導体業界については、今後も世界的な不況は継続すると考えられ、デ

フレ経済の影響による市場価格の下落がますます激しくなり、製造装置メーカーの中での生き残りをかけた競争が激化すると思われます。

一方、ディスプレイ関連機器とデジタル家電に関する分野では成長が期待され、また、ハイブリッドカーや二次電池などエネルギー・環境分野で新しい成長が始まると思われます。世界経済においては、中国は数年後に全世界の経済を牽引することが予想されます。

このような変化の激しい環境の中で、1.コストダウン戦略、2.受注拡大戦略、3.財務戦略、4.新商品開発戦略、5.新規事業戦略、6.グローバル化戦略の6つの重点戦略を踏まえ、真空技術をコア技術として、装置、材料、サービスなど総合的なソリューションを提供する企業集団として事業の拡大につとめます。



成長を続ける中国に新たな拠点を設立（2003年7月）

アルバックは、中国のハイテク中心地である蘇州市の蘇州シンガポール工業園区に、各種真空装置・関連部品の生産、加工、販売、サービスを行う新会社「アルバック蘇州」を設立しました。中国では「寧波アルバック」「アルバック上海」が業務を展開していますが、アルバック蘇州は両社と連携しながら、将来的には中国の中心拠点として機能する予定です。



完成予想図

「ECO-SHOCK」が優秀省エネ機器として表彰（2003年1月）

アルバックが開発した、クリーンルームに使用されるドライポンプ省電力化アタッチメント「ECO-SHOCK」が、(社)日本機械工業連合会の「第23回優秀省エネルギー機器日本機械工業連合会会長賞」と、「第3回日本真空工業会・日本工業新聞社社長賞」を受賞しました。電気使用料の70%低減が可能な省電力効果などが高く評価されました。



優秀省エネルギー機器表彰式での当社スタッフ(左)とECO-SHOCK(上)



大型FPD用製造装置の生産体制を強化（2003年5月）

アルバックとアルバック東北、アルバックテクノ、UMATIは、青森県の八戸北インター工業団地に大型FPD関連装置の生産設備を集約し、機械加工、表面処理、精密洗浄の一貫した生産体制を確立し、操業を開始しました。一貫設備が集約されたことにより、徹底したコストダウンを実現するとともに、世界のディスプレイ装置の生産基地になることを目指します。



新築された加工センター

アルバック・ファイをアルバックの100%子会社化（2003年1月）

アルバックは、固体表面分析装置の販売では国内トップのアルバック・ファイを完全子会社化しました。アルバック・ファイは、表面分析装置では世界最大手である米国のフィジカルエレクトロニクス社の研究開発分野向け表面分析装置の製造権と技術使用権、全世界に対する販売権をすでに取得しており、今後はワールドワイドなビジネスを展開していきます。

水晶発振子のバイオセンサーを開発（2002年12月）

アルバックは、生体分子間相互作用における結合分子重量を水晶発振子の周波数変化でモニタリングできる「4チャンネル水晶発振子バイオセンサー」を、(株)イニシウムと共同で開発しました。独自の技術により、4サンプルの同時測定や微量試料での測定、24時間までの長時間安定測定などが可能になりました。



4チャンネル水晶発振子バイオセンサー

不揮発性メモリ用製造装置など独創的な装置を相次ぎ商品化（2002年12月）

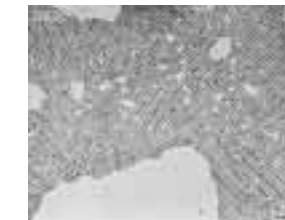
アルバックは、次世代不揮発性ランダムアクセスメモリのひとつである強誘電体メモリ(FeRAM)を量産するための高温エッチング装置とMOCVD装置やMRAM用スパッタリング装置を相次いで商品化しました。FeRAMやMRAMは次世代大容量メモリの本命といわれており、21世紀の社会生活を支える重要な基盤分野への応用が期待されています。



MRAM用スパッタリング装置

金ナノペーストの評価用サンプルを出荷開始（2003年1月）

アルバック・コーポレートセンターは、ハリマ化成(株)と共同で、独立分散金ナノ粒子(ナノメタルインク)を用いた金ナノペーストの評価用サンプルを出荷開始しました。金ナノペーストには必要な部分にのみ簡単に塗布できるという特徴があり、半導体接合の工程を大幅に簡素化したり、廃液処理を不要にするといった大きなメリットが期待されています。



独立金属ナノ粒子透過型電子顕微鏡像

高反射膜用の銀合金ターゲットを開発（2003年2月）

アルバックと真空冶金は、反射膜用途に適した銀合金ターゲットを開発しました。LCD市場などでは、低消費電力化を促進する動きから高反射膜材の需要が高まっています。銀合金ターゲットは、銀の高反射特性を保ちつつ、耐蝕性や密着性が従来に比べて優れており、反射型LCDをはじめ成膜材料として最適です。



銀合金ターゲット材

■連結貸借対照表

(単位:百万円)	当連結会計年度		前連結会計年度	
	2003年6月30日現在		2002年6月30日現在	
	金額		金額	
資産の部				
流動資産	116,375	104,977		
現金及び預金	15,683	10,842		
受取手形及び売掛金	51,878	55,198		
たな卸資産	43,587	34,571		
繰延税金資産	2,776	2,301		
その他	2,782	2,412		
貸倒引当金	△334	△349		
固定資産	57,572	55,274		
有形固定資産	44,248	43,159		
建物及び構築物	17,387	14,000		
機械装置及び運搬具	13,307	13,648		
その他	13,553	15,510		
無形固定資産	853	719		
投資その他の資産	12,469	11,395		
投資有価証券	6,775	6,606		
繰延税金資産	2,605	2,401		
その他	3,088	2,387		
繰延資産	1	24		
資産合計	173,949	160,276		

注:記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。

(単位:百万円)	当連結会計年度		前連結会計年度	
	2003年6月30日現在		2002年6月30日現在	
	金額		金額	
負債の部				
流動負債	94,257	81,306		
支払手形及び買掛金	35,536	22,133		
短期借入金	42,691	42,890		
その他	16,030	16,282		
固定負債	34,545	34,581		
社債	3,000	3,000		
長期借入金	23,449	24,025		
その他	8,095	7,556		
負債合計	128,803	115,888		
少数株主持分	3,194	4,286		
資本の部				
資本金	3,850	3,850		
資本準備金	2,859	2,859		
連結剰余金	35,420	33,738		
その他有価証券評価差額金	△13	△141		
為替換算調整勘定	△165	△205		
自己株式	△0	△0		
資本合計	41,951	40,101		
負債、少数株主持分及び資本合計	173,949	160,276		

注:記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。

■連結損益計算書

(単位:百万円)	当連結会計年度		前連結会計年度	
	2002年7月1日から 2003年6月30日まで		2001年7月1日から 2002年6月30日まで	
	金額		金額	
売上高	127,472	126,129		
売上原価	103,364	105,671		
売上総利益	24,108	20,457		
販売費及び一般管理費	19,371	18,181		
営業利益	4,736	2,276		
営業外収益	955	1,318		
受取利息及び受取配当金	134	79		
受取手数料	272	197		
持分法による投資利益	93	342		
その他	454	698		
営業外費用	2,142	1,604		
支払利息	931	943		
その他	1,210	660		
経常利益	3,550	1,991		
特別利益	603	602		
受取保険金	44	275		
貸倒引当金戻入額	153	185		
その他	405	141		
特別損失	874	842		
投資有価証券評価損	686	720		
その他	188	121		
税金等調整前当期純利益	3,278	1,751		
法人税、住民税及び事業税	1,869	1,707		
法人税等調整額	△726	△262		
少数株主損益	406	△363		
当期純利益	1,729	668		

注:記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。

■連結剰余金計算書

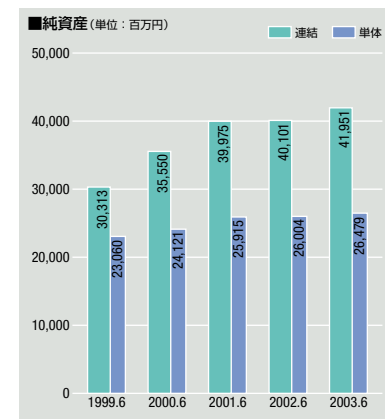
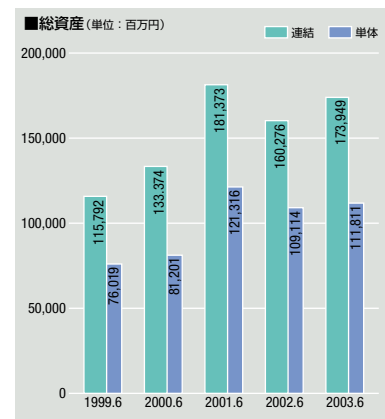
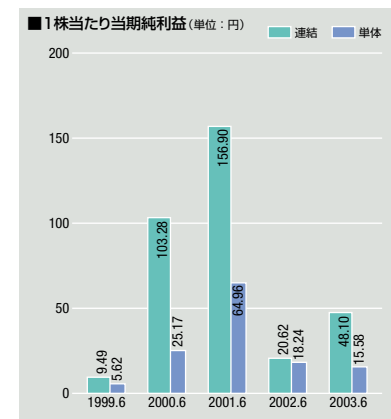
(単位:百万円)	当連結会計年度		前連結会計年度	
	2002年7月1日から 2003年6月30日まで		2001年7月1日から 2002年6月30日まで	
	金額		金額	
連結剰余金期首残高	33,738	33,576		
連結剰余金増加高	248	—		
連結剰余金減少高	296	506		
配当金	226	324		
役員賞与	69	182		
当期純利益	1,729	668		
連結剰余金期末残高	35,420	33,738		

注:記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。

■連結キャッシュフロー計算書

(単位:百万円)	当連結会計年度		前連結会計年度	
	2002年7月1日から 2003年6月30日まで		2001年7月1日から 2002年6月30日まで	
	金額		金額	
営業活動によるキャッシュ・フロー	14,135	6,192		
投資活動によるキャッシュ・フロー	△8,906	△11,768		
財務活動によるキャッシュ・フロー	△881	5,795		
現金及び現金同等物に係る換算差額	△67	66		
現金及び現金同等物の増加額	4,279	286		
現金及び現金同等物の期首残高	10,389	10,103		
合併によるキャッシュ受入	454	—		
現金及び現金同等物の期末残高	15,124	10,389		

注:記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。



単体財務諸表 (要約)

Non-Consolidated Financial Statements

■単体貸借対照表

	当期		前期	
	2003年6月30日現在		2002年6月30日現在	
(単位：百万円)				
資産の部	金額		金額	
流動資産	71,188	70,355		
現金及び預金	4,906	4,205		
受取手形及び売掛金	36,685	41,979		
たな卸資産	26,023	21,669		
繰延税金資産	1,441	1,433		
その他	2,163	1,214		
貸倒引当金	△30	△149		
固定資産	40,620	38,755		
有形固定資産	28,835	29,291		
建物及び構築物	10,036	7,226		
機械装置	9,421	10,542		
土地	4,585	4,585		
その他	4,791	6,936		
無形固定資産	397	397		
投資その他の資産	11,388	9,066		
投資有価証券	1,602	2,451		
子会社株式	7,468	4,625		
その他	2,316	1,990		
繰延資産	1	2		
資産合計	111,811	109,114		
負債の部				
流動負債	61,175	57,757		
支払手形及び買掛金	28,554	22,691		
短期借入金	24,836	25,875		
未払金	3,522	2,866		
前受金	1,736	3,179		
その他	2,525	3,144		
固定負債	24,156	25,351		
社債	3,000	3,000		
長期借入金	17,968	19,649		
退職給付引当金	2,580	2,094		
その他	607	608		
負債合計	85,331	83,109		
資本の部				
資本金	3,850	3,850		
資本剰余金	2,859	2,859		
利益剰余金	19,775	19,433		
(うち当期純利益)	(569)	(591)		
株式等評価差額金	△5	△138		
自己株式	△0	△0		
資本合計	26,479	26,004		
負債・資本合計	111,811	109,114		

注：記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。
注：商法施行規則の改正により、当期における貸借対照表の資本の部については、改正後の商法施行規則により作成しております。なお、前期についても改正後の表示区分に組み替えております。

■単体損益計算書

	当期		前期	
	2002年7月1日から 2003年6月30日まで		2001年7月1日から 2002年6月30日まで	
(単位：百万円)				
売上高	85,716	90,378		
売上原価	75,011	81,026		
販売費及び一般管理費	10,566	9,184		
営業利益	138	167		
営業外収益	2,553	1,964		
営業外費用	1,481	987		
経常利益	1,211	1,144		
特別利益	118	456		
特別損失	624	692		
税引前当期純利益	705	908		
法人税、住民税及び事業税	704	719		
法人税等調整額	△567	△402		
当期純利益	569	591		
前期繰越利益	609	1,027		
当期末処分利益	1,178	1,619		

注：記載金額は単位未満を切り捨てて表示しています。

■利益処分計算書

	当期		前期	
	2002年7月1日から 2003年6月30日まで		2001年7月1日から 2002年6月30日まで	
(単位：円)				
当期末処分利益	1,178,611,864	1,619,765,188		
固定資産圧縮積立金取崩額	16,735,355	16,481,764		
計	1,195,347,219	1,636,246,952		
これを次のとおり処分いたします。				
利益配当金(1株につき7円)	226,996,798	226,997,351		
役員賞与	63,985,000	-		
(うち監査役賞与金)	(11,400,000)	(-)		
固定資産圧縮積立金	7,464,413	-		
別途積立金	-	800,000,000		
次期繰越利益	896,901,008	609,249,601		

会社概要 / 株式状況

(2003年6月30日現在)

Corporate Data / Shareholders Information

商号：株式会社アルバック ULVAC, Inc.
 商標：ULVAC
 本社：神奈川県茅ヶ崎市萩園2500番地
 設立：1952年8月23日
 資本金：38億5,000万円
 従業員数：1,178名

役員 (2003年9月29日現在)

代表取締役社長 中村 久三
 代表取締役副社長 諏訪 秀則
 常務取締役 小日向久治
 常務取締役 山川 洋幸
 常務取締役 桜田 勇蔵
 常務取締役 中村 静雄
 常務取締役 常見 佳弘
 常務取締役 砂賀 芳雄
 取締役 小林 茂人
 取締役 天野 繁
 取締役 柏木 利廣
 取締役 福田 隆
 取締役(非常勤) 牧野 正志
 取締役(非常勤) 木村 光利
 監査役 菊城 宏
 監査役 川島 和也
 監査役(非常勤) 佐藤 恒雄
 監査役(非常勤) 長澤 正人

■連結子会社 (2003年9月29日現在)

アルバックテクノ株式会社
 アルバック九州株式会社
 アルバック東北株式会社
 アルバック精機株式会社
 株式会社アルバック・コーポレートセンター
 真空冶金株式会社
 日本リライアンス株式会社
 アルバック理工株式会社
 アルバック機工株式会社
 アルバック・ファイ株式会社
 アルバック・クライオ株式会社
 ULVAC Technologies, Inc. (米国)
 ULVAC TAIWAN, Inc. (台湾)
 ULVAC KOREA, Ltd. (韓国)
 寧波愛発科真空技術有限公司 (中国)
 アルバック イーエス株式会社
 UMAT株式会社

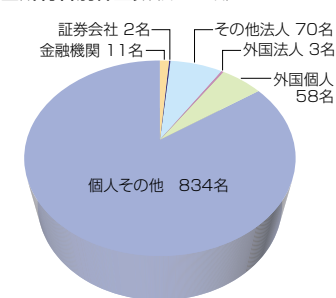
■株式の状況 (2003年6月30日現在)

会社が発行する株式の総数80,000,000株
 発行済株式の総数32,428,438株
 株主数978名

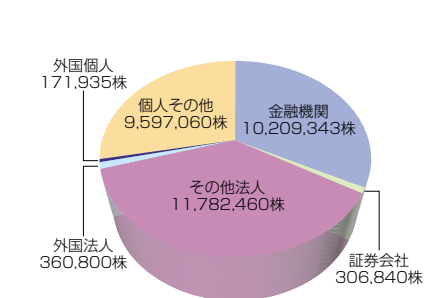
■大株主

株主名	当社への出資状況 持株数(千株)	当社の当該株主への出資状況 持株比率(%)
松下電器産業株式会社	3,582	11.04
日本生命保険相互会社	3,224	9.94
アルバック持株会	2,400	7.40
新星和不動産株式会社	1,718	5.29
株式会社みずほ銀行	1,604	4.94
包括信託受託者 / 三井アセット信託銀行株式会社 (委託者 / 株式会社三井住友銀行)	1,604	4.94
株式会社UFJ銀行	1,604	4.94
稲畑産業株式会社	869	2.68

■所有者別株主数 (計978名)



■所有者別株式数 (計32,428,438株)



Webページ紹介

当社ホームページでは、最新のニュースや技術情報など、当社をご理解いただくための様々な情報を提供いたしております。

www.ulvac.co.jp



ULVAC



本社/工場(茅ヶ崎)

■株主メモ

決算期	6月30日(配当金受領株主確定日)
定時株主総会	9月下旬
基準日	6月30日(臨時に必要なときは予め公告した日)
名義書換代理人	東京都港区芝三丁目33番1号 中央三井信託銀行株式会社
同事務取扱所	〒105-8574 東京都杉並区和泉2丁目8番4号
お問い合わせ先	中央三井信託銀行株式会社 証券代行部(証券代行事務センター) TEL.03(3323)7111(代表)
同取次所	中央三井信託銀行株式会社 全国各支店 日本証券代行株式会社 本店、全国各支店
公告掲載新聞	日本経済新聞

www.ulvac.co.jp

株式会社 アルバック

本社/工場
〒253-8543 神奈川県茅ヶ崎市萩園2500
TEL. 0467-89-2033

東京事務所
〒104-0028 東京都中央区八重洲2-3-1
TEL. 03-5218-5700